



# 大正時代の 銀座の系譜



松本重雄

(全国銀行協会連合会  
および東京銀行協会顧問)

はし  
が  
き

私は銀座の表通りの商家で、大正十年（一九二一）まで育った。銀座は私のふる里である。

その銀座は、大正十二年の大震災で、あとかたもなく瓦壊した。その頃は麻布に住まわっていて、銀座の焼ける火を遠望した。その後も戦災の破壊があったが、大震災

までが明治以降の近代銀座の前期であると考えていた。最近になって、私とほぼ同年輩のアメリカのある著名な経済学者が、「近代世界」を一九二〇年頃で二つに分けて考える見方に意味があること、日本にとってもそれが意味があること、を述べておられるのを読んだ（昭和五十三年四月七日付の朝日ジャーナル記念特集号に寄稿された Kenneth E. Boulding 氏の「低成長時代への対応」）。

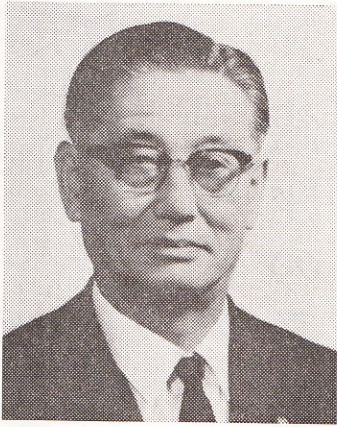
銀座のことを語り記したものは沢山にあるが、銀座の表通りの生態を肌で知っている人が、その前期の銀座について、経済面を主として記したものは稀であろう。そう考えて、この学者の時代の分類により、銀座の前期を素描することにした。やってみると、大きな考証があるのが痛感され、覚え書きをまとめたに過ぎない。

参考に、Boulding 氏の意見を述べておくことにしたい。

○祖父母が育った頃までは、人間の生活の何世紀にもわたる停滞の時代が続いていた。そのあとで、急流を下るような激しい進化の時代が始まったのである。私が育った頃は、既に「近代世界」の時代になっていて、祖父母の成育時代とは、人間の生活に雲泥の差があった。

○日本の発展も同様である。日本が明治維新によって、一八六八年（明治元年）突然に「近代世界」の仲間入りをしたと考えるのは誤りである。欧米でも、その頃に、それが始まったばかりで、日本はせいぜい二〇年程しか遅れてはいなかった。日本は、たちまちのうちに欧米の科学技術に追い付いたから、一九二〇年頃の東京で育った少年は、「近代世界」に育ち、激しい進化を十分に経験したはずである。

○一八六〇年から一九二〇年にかけての激しい変化の時代こそが、それ以前の長い停滞期とをわかつ質的な変化の時代なのであって、一九二〇年から現在までの変化よりもはるかに大きな変化なのであった。一九二〇年からあとの変化は、量的には激しい変化だが、そ



筆者 松本重雄氏

の前の六〇年の質的变化の延長線上の変化である。

Boulding 氏と同時代に、私はこの質的变化の「近代世界」を、銀座の一隅で経験して育ったのである。

### 先端をゆく銀座の商品

私は、明治四十一年（一九〇八）に銀座で生まれ、大正四年（一九一五）から同十年（一九二一）まで、銀座周辺の人達のゆく数寄屋橋の泰明小学校に通った。泰明小学校は、当時としては施設においても抜群の学校であった。卒業と共に、住居が麻布の筈町に移って銀座の生活を離れたが、その後から、銀座の商家が店と住居を分け始めていたと思われる。これも銀座の変化の一つであったが、二年後の大震災は、この変化を著しく促進したし、大きな商店街が、渋谷や新宿などにも発達するようになって、銀座はその後も繁栄したが、違った姿のものになった。

従って、私の経験した頃が、銀座が明治以降に昇りつめた良き時代の盛りであったろう。そうした意味で、大正十年頃の銀座を描いてみたい（木村莊八編著の「銀座界限」などを参考にした）。

銀座の商店と商品は、今もそうだが、その時代の経済の発展段階の顔である。庶民向け商品も多いが、当代の外内における技術と技巧の粋を集め、流行の先端を知りうる。一方では、時代の移り変わりで去ってゆく商品の残っている姿も見られる。

銀座八丁西側に店を張っていた商店の店舗数は大正十年頃で、ほぼ二五〇店である。西側と東側では西側がやや数が多い。尾張町（銀座四丁目）で分けると、京橋寄りよりは、新橋寄りの方が幾分多い。そのなかで、今日も表通りに店を張って立派にやっておられる店が、三〇近くあるように思える。中には、資生堂・服部・御木本など大企業になったものもあれば、ほぼ同じ間口で老舗として高い信用と愛顧をえておられるものもある。その頃は表通りの店だったが、いまは横町や裏通りで繁昌している文祥堂や八咫家やたのような店もある。

その頃の銀座八丁の商品を荒く分類してみると次のようになるう。

○古典的商品の専門店の扱い品―呉服・服飾・足袋・下駄・手拭・糸類・鶏卵・漆器・陶器・美術品・人力車など。いま残っているのは、呉服と服飾と陶器が主なものであろう。

○明治以後の商品の専門店の扱い品―食料品・パン・煙草・玩具・絵葉書・書籍・洋紙・洋服・洋品・帽子・

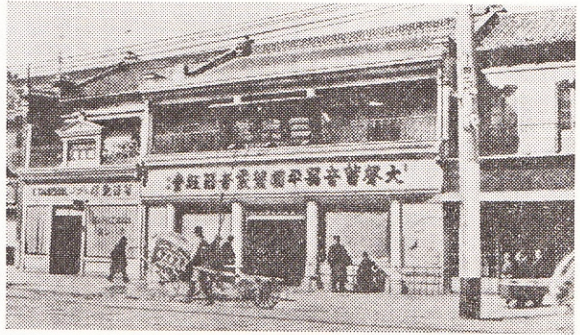
敷物・洋傘・眼鏡・額縁・義足手・真珠・文房具・楽器・写真機・蓄音機・機械器具・印字機・時計など。明治以後の文明開化は、このように商品の形で銀座に花開いているが、店舗数では洋服・洋品・眼鏡が目立っていたし、機械器具では表通りに旋盤が陳列されていたのを覚えていたが、これらはその後銀座を離れて、大きく発展していった商品である。

○各種和洋飲食品の提供は、ピヤホール、カフェーを含めて内容が豊富になっていた。

明治から大正にかけての銀座らしい先端的商品に写真機と蓄音機があつて、一、二店の専門店があつた。時代の寵児ちやうじになりつつあつたのが活動写真館で、金春館とか豊玉館が老若男女を喜ばしたが、その頃は表通りになく、横町や裏にあつた。

私の育つた商店は、その蓄音機屋の三光堂であつた。そして、この三光堂の店舗については、お菓子のお舗風月堂のものととも、明治四十三年（一九一〇）の美事な出来栄えの写真がいまも残されている。

次ページの写真は、渋沢篤二という方の撮影にかかるもので、特記に値する事情がある。明治のわが国経済の先達であつた渋沢栄一氏は、新商品である蓄音機にも関心が深かつたが、篤二氏はその長男で、故あつて父栄一氏全盛の頃に隠棲いんせされていたが、大変な義太夫の名手で、



銀座 三光堂（明治43年）  
 洪沢篤二氏写真集「瞬間の累積」より

写真愛好家としても著名であった。

その貴重な作品を、その子息である洪沢敬三氏（元

日銀総裁・蔵相）が、昭和三十八年

（一九六三）に、「瞬間の累積——

洪沢篤二明治後期撮影写真集」として編集し出版された。

三光堂の写真は、洪沢篤二氏が特別な因縁で特に美事に残されたの

であらう。この写真をみると、三光堂の六間間口の店舗の両側の陳列の上に、大きく、「大聲蓄音器平圓盤發賣器販賣」とあって、「直輸入發賣元」と添えられている。

そして、陳列の両袖と二階のバルコニーとは、当時最大の光源であったガスを点灯する大型の蓄音機の広告施設が設けてある。私の記憶では、銀座にもそんな派手な

広告灯はなかったと思うが、現在のネオン広告の先祖が

ガスであったことは興味深い。

### 蓄音機と社会主義

蓄音機は、その後の音響革命といわれるラジオ、テレビ、ステレオなどの先駆であるが、当時は漸く筒型の蠟管式から平円盤と称せられる当今のレコードにまで発達した頃であった。正に音響商品の質的進歩の時代に入った頃であった。

その吹き込みと製造が、蓄音機の製造と共に、国産化したのは、大正に入った頃で、技術導入の難しかった頃なので、吹き込み・製造の技術を取得するについての関係者の苦労は、並み大抵の苦渋ではなかったようである。国産化とはいっても三光堂の新宿の工場的情景は、家内工業の域を出るものではなかった。

それよりも、この当時の画期的商品のわが国への導入と普及には、明治のわが国の社会主義思想の発達との間に興味深い係わりがあった。このことは、戦前、私の父もつとめて秘して、小声で内々話していた程度であった。

蓄音機がわが国へ渡来したのは、明治二十三年（一八九〇）頃で、始めは浅草の花屋敷で、蠟管からの発声をゴム管で耳にあてて聞かせる仕方、余興としてお目見

栄したとされている。そのうち、銀座の裏の縁日でも聞かせたとの記録がある。それが、明治三十二年（一八九九）六月、十九世紀最後の年に、わが国最初の蓄音機専門店三光堂として、浅草の並木町で（のちに銀座に進出）、松本武一郎・片山潜・横山進一郎の三人の共同事業の形で、三人を表象する三光堂の屋号によって開店した。

松本武一郎は、私の父の実兄で、大正に至らず早逝したため、父の常三郎（横須賀海軍工廠技術要員）が継ぎ、かえって技術開発を進めえたのであった。片山潜は、武一郎の親しい友人だった。このことは、商人に転じた武一郎自身の思想傾向も推測できることである。片山潜は、申すまでもなく、わが国の社会主義と社会運動の草分け的存在で、昭和八年（一九三三）にモスコで客死した人である。この人が蓄音機店創業に加わっていたことは、三光堂開店の翌々年（一九〇一）に、片山潜が幸徳秋水らと共に社会民主党を結成、即日禁止されていることと考え合わせると、蓄音機の生い立ちは劇的であった。そうした事情で、蓄音機という先端商品は、わが国の初期社会主義と併存していたわけで、経済社会史の一コマになりうると思う。

明治末年から大正にかけて一世を風靡した音曲は、桃中軒雲右衛門の浪花節であった。その忠臣蔵外伝などの全曲目を、当時として世間を驚かす程の報酬を払って吹

き込みをし、原盤をドイツに送って象印レコードとして輸入した。輸入直後、明治天皇崩御のため長い歌舞音曲停止にあたった。その間に、今日のいわゆる海賊盤が出回り、三光堂が大正大震災前後の外国資本の攻勢下で米國資本に買収され、蓄音機業界がしばらく外国資本に独占される遠因ともなった。

ちなみに、当時はレコードが著作権の対象となっておらず、海賊盤に対する訴訟は大審院で、浪花節は音楽にあらずとして敗訴したが、大正九年に至り著作権法改正によって始めて著作権の対象となった。私の東大時代、穂積重遠教授は民法講義でこの挿話を述べられたのを記憶しているが、穂積教授が父と同郷であったことに係わりがあったかと思う。

また、不世出の浪曲家雲右衛門丈が、実は目に一丁字無く聞き覚えによって口演したとの秘話があるが、文句が確定していなかったことが、大審院で音楽にあらずと解された一因になったかもしれない。近代日本の形成期における一つの裏話である。

### 有ったもの・無かったもの

今日の銀座八丁と当時とを比較して、当時有って今な

いものと、今あってその頃無かったものを記すことは、  
経済の変化の一系譜として、興味のあることである。

○当時はあって今ないもの

京橋のたもと西側に讀賣新聞社があった。銀座の表通りは、新聞社が幾つもあった時期があった。次第に裏に移って、明治十年（一八七七）に草分けとして進出した讀賣一社だけが残っていた。同社はサービスの一つとして、春秋の大角力すまうの取組速報を、社壁にしつらえた力士の大きな板札で、国技館からの電話によって好角家を楽しませてくれた。

その頃あったものに、今は奇妙に思うが、郵便局が二つと、教会と旅館があった。銀座のひと頃の名物となつたカフエーが、裏ではなくて表通りの銀座の新しい流行になり始めていた頃であった。

○当時はなかったもの

勸工場かんこうばが一つ残っていたが、百貨店は一つもなかった。勸工場の発祥は早くて、ある時期銀座の名物であったが、それは、相当広い店舗に設けられたいくつもの商店用ブース（仕切り）を、商店が借りて展示販売する集合店舗で、最後のものが新橋の傍に残っていた。

百貨店は、当時はなくて、大震災のあと、間口の広がった商店を引き継いで、まず松坂屋が大正十三年（一九二四）に開店、次々と銀座に進出した。百貨店の進出は

銀座の性格を大きく変えた。松坂屋が始めて下足預かりなしに踏み切って土足で出入りさせたことは、画期的なことであった。

百貨店と共に、銀座に大きな変化を与えたのは、銀行の銀座への大きな進出であった。大正十年の銀座八丁における銀行店舗数は七店であって、西側二つに対して東側五つであった。尾張町（銀座四丁目）の西南角には、八十四銀行本店があった。横町や裏通りに銀行があった記憶はない（八十四銀行は昭和二年の恐慌時に休業して昭和銀行への合併を経て安田銀行——後の富士銀行——に合併された）。

現在は、東側西側とも七店舗ずつの銀行があるが、店舗の間口の広さと立派なことで当時とは違うし、銀座の各横町に展開する沢山の銀行店舗を加えると、銀座の銀行は、都長銀・信託・地銀・相銀と大変な店舗数で、証券会社と保険会社を加えた金融界の銀座進出はまさに隔世の感がある。

百貨店と銀行は、夜は閉店して暗くなるし、専門小売店とは肌合いの違う存在なので、ひと頃銀座の軟かい雰囲気は大きく変わり、夜の衰退も招く一因にもなった。一つのブロックの両端に銀行の店が出来る、その丁目全体が衰微するとも言われた。近年、百貨店も銀行も、夜間の照明や店舗の構造について工夫するようにな

った。

## 銀座の生活風景

銀座八丁西東は、「銀ブラ」といわれて、貴顕たると庶民たるを問わず、歳末を除けば、おっとりとした楽しい散策の場であった。静かな散策を好む人は夜店のない西側を好んだものであった。

当時はまだほとんどの商家の奥には、主人家族と店員が住まっていた。横町と裏通りには、銀座八丁の大切な補助的役割をする酒屋・八百屋・魚屋・豆腐屋・氷屋・牛乳屋・理髪と髪結・銭湯などが軒を並べたし、各種職人稼業の家も沢山にあった。「しもたや」と呼ばれた住宅も相当混じっていた。新橋寄りには、新橋花柳界関係の多くの「やかた」が、陽気さを加えていた。

銀座八丁表裏を総まとめにしてみると、銀座は全体で、下町らしい大きな生活圏になっていたのである。その人達の子弟の学校が泰明小学校であったから、そこは庶民性の豊かな学校であった。今も続けてやっている私の卒業時の同級会は、バラエティに富んだ庶民の温かい集まりであって、銀行などへ入ってしまった人間は大きな例外である。

当時の銀座にとつて、もう一つ重要な存在は、京橋の川の両側に、通称「大根河岸」と呼ばれた東京青物市場があったことである。青物は主に舟で運ばれて、早晩から賑やかな取引が行われた。その若い衆こそは、銀座のいなせな気風の柱であつて、銭湯では入れ墨の威勢を添え、氏神の日枝神社の当時日本一といわれた大神輿みここしの担ぎ手でもあった。

その頃は銀座の表裏のどの家にも、まず風呂場はなかったから、横町の銭湯は、町の社交場であつた。つれてゆかれた子供達は、男湯と女湯の両親の間を遊んで回つたのであつた。

銀座の商店には、迷路といつてもよい狭い裏の路地があつた。ご用聞きや各種の出入りの人達は、店の表を使うことはなかった。威勢のいい魚屋が、朝夕この裏口から飛び込んでくる姿は、もう永久に見られない下町の派手な風物であつた。

青物市場と共に、併記しておかねばならぬものは、当時の魚市場が日本橋の川沿いであつて、両々相俟あひまつていたことである。大震災後、地元の反対を押し切つて、両市場が移転廃止されたことは、銀座の変化に計りしれぬ大きな要因となつた。

当時の銀座の商店の経営は、かなり前近代的なつましやかなものであつた。番頭格のものは通いであつた

が、小僧さんといわれたような若い従業員は住み込みで、台所に近い広間で、大きなおひつを前にして食事をした。月々の公休などはなく、盆と正月の戴入やまじりしか休みはなかった。夜は商家の書き入れ時で、十時頃まで店をあけているのが多かった。銀座のつましきの一例は、私の店などでも、夜になると、年寄りの会計が、銀行券に丸型の火のしをかけて、皺しわをのばしてきちんと整理して、翌日のお客様に備えたものであった。

## 交通機関と道路

銀座の交通は、注目すべき幾変遷をしている。

明治五年（一八七二）に新橋・浅草間に乗合馬車が生まれ、明治十五年（一八八二）にそれが鉄道馬車になり、明治三十六年（一九〇三）に電車になって、銀座を馬糞から開放した。翌年に土橋・お茶の水間の外濠線の電車が開業して、銀座の外延が広がった。銀座に青バスが通ったのは、大正八年（一九一九）であった。この一連の進歩こそ、昭和九年（一九三四）以降の地下鉄の開通などとは、比較にならない大変革であった。

銀座にとって、いま一つの大きな変化は、大正三年（一九一四）の東京駅開業である。それまでは鉄道の起

点が新橋駅であったから、銀座八丁は南の新橋に向いていたが、東京駅ができて、東海道時代の日本橋向きに戻ると共に、数寄屋橋向きにもなった。銀座はどう変わるのだろうと話していた銀座の人達の声が、耳に残っている。

私は、明治天皇崩御の頃の銀座のことを、かすかに記憶しているが、大正四年（一九一五）十二月、大正天皇が、即位ご大札奉祝で上野への道筋、銀座八丁を無蓋馬車で通られた情景を、目にみるように覚えている。つくづく良き時代の銀座であったと回想される。

銀座八丁は、社会の変転に無関係ではなかった。内閣打倒その他、特に大正七年（一九一八）の米騒動では、商店や交番が焼き打ちを蒙こうむった。

銀座八丁の名物柳並木も幾変遷があった。大正十年（一九二一）にも銀杏いちょうに変えられ、昭和七年（一九三二）に柳に戻っている。私は、柳の時代に育ったが、その頃は、銀座の商家の負担で、柳の下には美しい花壇が色を添えていた。そして、並木と共に忘れ難いのは、並木の下には、商店の運搬用荷車（人力による）が、荷箱に屋号や広告を入れて置かれていたことであった。当時、自動車運搬に始めて使いだしたのが明治屋であった。一番という番号の自動車が登場した。

銀座の道路は、電車が通って敷石が敷かれて、馬から開放されたときが近代化の第一歩であったが、その後も



人道の舗装と共に幾変遷している。アスファルトをしみこました木製の煉瓦型のを敷きつめたことが、大震災の火勢を激しくしたことも忘れ難い。

銀座の交通が、銀座の外側をとりまく川の水運に当時まだ大きく助けられていたことは、大根河岸の青物が、近在からの荷車を別にすると、主に舟で運ばれていたのでも判る。川の水も、たまには若い衆が泳いでいるのを見かけたし、月島がまだ小学校の水練場だったことで、水の程度が知られるであろう。

銀座の道路で忘れ難いのは、夜店のことである。銀座とは切っても切れない存在であったが、夜店について、書かれたものも多いので、一、二の点のみを記したい。

銀座といえは夜店を思い出すほど、銀座と夜店は切っても切れないものであった。銀座には季節の市という臨時の夜店もあった。これらは、夜店が通常は出ない西側に並んだものであった。その一番賑やかなのが歳の市で、暮の二十五日頃から大晦日の夜明けまで正月用品で賑わった。

夜店といえは東側で、尾張町界限が中心であって、新橋や京橋の両端になると、出店もまばらだった。明治も早い頃は、夜店の商人から立派な表通りの商人が出たくらいで、随分色々な商品が並べられていたが、銀座らし

い夜店の一つの中心は、かなりの骨董品を含んだ古道具屋、古着屋、古本屋と植木屋であって、商店とは競合していなかった。

この夜店の外に、その頃東京を賑わしたものに縁日と寄席があったが、銀座では裏と外側にあつて、銀座八丁の表の点景ではなかった。

## あとがき

銀座については、沢山の記述があり、かつて銀座に縁の深かった文芸家の方々のすぐれた文章もある。しかし、経済を軸にした記述はすくないので、その穴を埋めたいと思つたが、今は廃業して跡もないとはいへ、家業に触れざるを得ない点が、大きな気おくれであった。この点は寛恕を頂きたい。記述の誤りや記憶違いも多かるう。識者や私の泰明小学校の同級生男女二〇余名の方々からも、ご親切なご訂正ご教示を頂きたい。

銀座の繁栄を祈り、当時、東側の商店に映えた夕陽の美しさと、夜店のアセチレン灯の鼻を突く臭いを追憶したい。